

大阪商業大学学術情報リポジトリ

戦前デパート・ガールー百貨店のストア・イメージ

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2018-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷内, 正往, TANIUCHI, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/514

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



戦前大阪のデパート・ガール

百貨店のストア・イメージ

谷内正往

はじめに

1. 百貨店のストア・イメージ
 2. 阪急百貨店の就職試験体験記
 3. そごうの半日勤務店員
- むすびにかえて

はじめに

戦前小売業において百貨店（デパート）は唯一の大型店であった。今でこそ専門店ビルやショッピングモールと区別がつきにくくなっているが、百貨店は単一企業が都市の中心に立地し多種多様な商品を部門別に品揃えし、対面販売を行う小売業態である。当時の百貨店は流行発信の役割を担い、その文化的意義も大きかった¹⁾。

ここでは、百貨店で働く女子店員＝デパート・ガールに注目したい。なぜなら、大正期から職業婦人の台頭²⁾があり、百貨店にも多くの女性が雇用されたこと、さらに経営的な理由から学卒の女子採用³⁾が行われたことを明らかにしたいからである。特に当時の都市百貨店では1,000人規模の女子店員が雇用されたので、対面販売によるストア・イメージが重要になったと考える。

そこで、まず昭和初期大阪の百貨店の女子店員に関する新聞記事を紹介し、百貨店のストア・イメージ（顧客が店に対して抱く心の中の像⁴⁾）を明らかにしたい。その上で、実際の

1) 山本武利・西沢保編『百貨店の文化史』（世界思想社、1999年）が一つの到達点である。最近では、神野由紀『百貨店で「趣味」を買う 大衆消費文化の近代』（吉川弘文館、2015年）『国立歴史民俗博物館研究報告』（第197号、2016年2月）に所収の各論文、末田智樹「大正期いとう呉服店（松坂屋）の接客法に関する史料紹介」『中部大学人文学部研究論集』第36号、2016年7月）等がある。

2) 村上信彦『大正期の職業婦人』（ドメス出版、1983年）および、吉見俊哉「デパートガールたちの世界（上・下）」（デパートという文化・第11・12回『RIRI 流通産業』第27巻第4・8号、1995年）なお、戦前の女性労働（者）の諸類型については、田崎宣義「女性労働の諸類型」（女性史総合研究会編『日本女性生活史』第4巻近代、東京大学出版会、1990年）西成田豊『近代日本労働史』（有斐閣、2007年、第5章）を参照のこと。

3) 谷内正往『戦前大阪の鉄道とデパート』東方出版、2014年、p341-345。

4) 通常、店の立地、価格、商品の銘柄・品質・品揃え、販売サービス、物流などのあり方によって消費者の心の中に形成されるものを「小売イメージ」と呼ぶ（来住元朗『消費者行動と小売マーケティング戦略』中央経済社、1986年、第4章）。小売イメージのリアル店舗に関係する部分を小稿では特に「ストア・イメージ」と呼んでいる。

店員採用がどのように行われていたのか、阪急百貨店の「就職試験」を受けた女子商業学校生徒の体験記から探ってみたい。面接の様子は、これまであまり知られることがなく、面接のやりとりから何かわかるかもしれない。他に、そごうが当時では珍しい「半日勤務店員」の募集を行っており、これも紹介する。売場の専門性を強化する目的と宣伝目的と両方あり、どちらも店の印象に影響すると思うからである。事例は大阪地方が中心であるが、その理由は、当時もそうであったように、大阪が今でも百貨店の激戦区だからである⁵⁾。

1. 百貨店のストア・イメージ

『大阪朝日新聞』が「近代デパート色」として1933(昭和8)年1月6～12日にかけて、当時の百貨店6社(南海高島屋・松坂屋・三越・阪急・十合〈そごう〉・大丸)について女子店員の接客対応を中心にまとめている⁶⁾。

1-1. 南海高島屋

女学生気分の女店員が多いという。「だいたい建物からしてピンク色で、装飾もこまかく、ちよつとみるとクリスマスケーキのやう、だからなかに働く娘さんたちもスラリとのびたワン・ピースの洋服に、白いレースの首飾りを嬉しさうにチラチラさせて、明るくきびきび、お客との応待にまで女学生時代のバザー気分」である。また洋服がユニフォームなので、和服を着てくると一日五銭ずつの罰金が科せられるという。会社が小売イメージを意識

図1. 昭和初期、南海高島屋屋上でくつろぐ女子店員



出所：『写真集 なにわ今昔』毎日新聞社、1983年、p154。

5) 『読売新聞』2014年3月6日付、第6面。

6) 前掲『戦前大阪の鉄道とデパート』第8章。原資料は『大阪朝日新聞』1933年1月6～8、10～12日付(各第5面)。

しているものと思われる。

彼女たちは東京のデパートのような垢抜けたあいさつをする。それはいつもポケットにし
のばせている「接客用語虎の巻」による。

「一、いらっしゃいませ 二、お早うございます(朝十時まで) 三、ほかに御用はござ
いませんか 四、ありがたうございました 五、またどうぞ」

また売り場にはスポンサーという販売術の達人が控えている。例えば、真冬の寒い日に
「夏のネクタイを見せてくれ」という老紳士にスポンサー小寺きみ店員は少し考え込んで、
即座に「はい、かしこまりました、どこか外国の暑い国にいらつしやる方に贈物なさるん
です」と言って老紳士の意図を見抜いて、たいそう喜ばれた、とある。

サービスでいちばん光るのは、エレベーター・ガールである。「ライト・ブラウンのお
しゃれ服を着」て『『ご案内』と書いた小豆色の袷袢をかけた少女が、金泥ぬりのまるで仏
壇みたいなエレベーターへお客さまを招じ入れると、両方から扉を開けて『お待どほさま
でございました』と恭しく合掌してくれる、中のお客さまちよつと変な気分になる、実に念の
入った丁寧さで、相当あくどいはずの大阪人もこれには参るらしい。まさに「ハレの場」
としての百貨店を象徴している。(図は昭和初期の南海高島屋屋上でくつろぐ女子店員であ
る)。

1-2. 松坂屋

「お客さまには腰低く、いかなる場合にも御無理御尤もを忘るべからず」という心得が店
員に徹底している。店の方針として「『実用品を最も安く』をモットーに中産階級以下の買
物大衆を目標にして」いる。だから店員の服装も「飾りのない紫紺の事務服で、髪の結い方
もごくお粗末、わるくいふと女中タイプといふことになる」。

「だがサービスは大衆向きに非常に丁寧」である。例えば、お客がくると買う前から
「いらっしゃいませ、ありがとうございます」、そして品物を渡し終わると「ありがたうご
ざいました」と頭を下げ、客の後姿に「まいどありがたう存じます」と「三段論法」で呼び
かける。食堂では、母親が食べ終わるまでその乳飲み子を守りしてくれるという。

本店が名古屋にあるためか大阪弁と名古屋弁がまざるようである。他に老舗のせいか風紀
問題はやかましく、女店員のタイムカードに毎日帰宅時間を記入し父兄の承認印をもらうよ
うにしているという。

1-3. 阪急

女店員だけで1,500人。小さな女学校三つ分ぐらいの規模であるという。照明はふんだん
に派手に使われているが、店舗も店員も「まだデパートとしてはこれからで、天井の壁の色
そのまま、どつか乳臭い匂いがする」と。

「素人経営でおまけに歴史が浅く経験が少ないといふので、売り子も一生懸命なんだが、
まだまだいたについては申しかねるのが多い」と酷評されている。「実意はあるが洗
練されぬ」という。

女店員は酒のつまみの「からすみ」が分からなかったり、「け」(=鶏のこと)を知らな
かったりする。沿線の良家の子女であるからと推察している。

二階パン売り場のレジスターは1日平均3,000回以上回転する。はかりも3ヶ月でだめになるという。サラリーマンの押しよせる夕方のラッシュアワーの時は「二十四人の白エプロンが千手観音そつちのけの電光石火サービスをやる」という。

1-4. 三越

地方からの「お上りさん」がコーヒーについている角砂糖をガリガリかじっているのを見て、「あのウ、お客さま、お砂糖はコーヒーのなかに入れてそのまま召し上がった方が美味しうございます」という。この「ていねいさ、サービスのこつが三越の生命」とあるという。

女店員500人の服装は「耳かくし、お下げはご遠慮ありたし」との店則に従い、地味な和装を藤色の事務服に包んでいる。華やかさはない。すべてにおうようで、すぐにとんできて「いらっしゃいませ」といったりお客を監視するようなこともない。この点松坂屋とは対照的である。

三越の絵を描いた風呂敷を「聯隊旗」と呼び、その風呂敷をもっている人に対して店員は電車の中で席を譲ったり、道で困っている人に力添えしたりする。

おとなしい日本式のかくし化粧は南海高島屋と対照的であるらしく、それがお客に好感を与えているようである。女店員への結婚申し込みでは群を抜くという。

1-5. 十合(そごう)

「座売り時代の面影をそのまま、この間まで豊敷きの応待を墨守してみた十合呉服店は土蔵造りの平家を改造しただけに近代デパートとしてはちと背が低すぎる」。しかし、心齋橋筋に培った地盤は「お得意七千軒」もあり外商を専門にしているようである。

呉服第一主義で、例えば次のような接客サービスとなる。たいていお客は店員の名前を知っていて「わて大島の羽織一枚ほしい思ふねんけどあんたに見立てをまかしときまつサ」といった心安さ。親しくなるとお茶に招かれたり、一緒に芝居を見に行ったりする。お客の多くは、奥さんかお茶屋のかみさんである。足袋一足買ってもつけがきく、「顔」がものをいう店である。

女店員はダンスやスポーツには見向きもせず、お嫁入りの準備にお茶やお花に夢中である。「なでしこ会」という団体があり2週間に1回稽古があるという。

1-6. 大丸

「ツンとすました洋装の美女」、大丸の女子店員はそんな感じがするという。「シヨウウィンドウを覗いても、新聞広告を見てもすつきり洗練されてみて、確かにスマート清麗な尖端色が冷たく光つてゐる」。「職業に目ざめたインテリ女性としての『誇り』を持つてゐる」。ごく最近の出来事として、ある紳士が現金1万円を出して百円の商品券が百枚ほしいのだが、ついては現金で払うから「いくらか割引せぬか？」と問うたところ、びっくりもせず「ありがたうございますが、あたくしどもの店におきましては、十銭のお客さまも一萬円のお客さまも同じやうにお取扱いいたしてをりますので、割引には一切応じかねます」と答えた。紳士は苦笑いして「うん、さすがは大丸だ！」と関心した。しかし買ってはくれない

かった。

大丸はアメリカ流の合理的な販売方法を実践しているという。すなわち、お買上げ品を配達するより、客に持って帰ってもらうことで費用を節約し、お買上げ品の後に必ず関連商品を勧めて客の購買額を高めているのである。

それぞれの百貨店の(女子店員の)特徴がよく表現されている。まだ「座売り」を引きずっている十合、良き伝統を残す三越、中産階級以下もターゲットにしようとする南海高島屋と松坂屋、もともと呉服店の伝統をもたない阪急百貨店、合理的販売の大丸といった具合である。

2. 阪急百貨店の就職試験体験記⁷⁾

デパート・ガールは1901(明治34)年三越⁸⁾が初めて採用したのを嚆矢として、昭和初期に多くの百貨店でその数が飛躍的に増える。女子店員の比率が多いといわれる白木屋の場合、1928年6月28%、1929年1月40%、同年7月44%、同12月47%と急速に女子店員比率を高めていく。他の百貨店も同様の傾向を示す⁹⁾。

表は大阪の各百貨店の店舗面積(すべてが売場面積ではない)と従業員数をまとめたもの

表・大阪の百貨店、床面積、従業員数一覧(1936年頃)

店名	店舗面積(坪)	従業員数(人)	備考
京阪デパート※	2,500	541	
そごう心齋橋店※	10,050	3,200	
大軌百貨店※	4,301	950	うち女子600
大鉄百貨店※	7,000		建築中
大丸大阪店	12,258	2,598	
高島屋南海店	10,039	2,542	
高島屋長堀店	4,339	1,108	
阪急百貨店	16,787	3,700	
松坂屋大阪店	6,200	1,370	
三越大阪支店	7,659	1,446	

備考: 店舗面積は総建坪数、※印は総坪数が「約」数、大鉄百貨店は未開業。

出所: 狩野弘一編『百貨店総覧(昭和12年版)』百貨店新聞社、1937年12月、各店紹介ページより作成。(同書p15に一覧表があるが、欠数があるので使わなかった)

7) この節「阪急百貨店就職試験感想」(『校友会誌』第21号、神戸市立女子商業学校、1936年3月)による。同会誌には、「職業戦線第一歩」として他に「三菱電機」への入社試験内容や、在校生の職場体験(年末の数日間)などが記されており、阪急百貨店の職場体験記もある。なお、引用にあたって旧字体は新字体に改め、人名はイニシャルとした。

8) 三越の女子店員最古参の古谷ツルの記述として、古谷ツル「女店員のことども」(小松徹三編『日本百貨店総覧第一巻三越』日本百貨店新聞社、1933年、p171)、同「男店員は汝等の敵と思への訓へ」『商店界』第13巻第7号、1933年7月、p103-105)がある。中村利器太郎『私より見たる三越回顧録』(日本百貨店通信社、1936年、p71-74)も参考になる。

9) 社会調査協会『現代職業総覧(商業篇Ⅱ)』春秋社、1931年、p33-34。

である。1936(昭和11)年頃、大阪の主要百貨店は1万坪(約3万3,000m²)前後の店舗面積を持ち、1,000人規模の従業員を常時雇用するようになってきていることがわかる。表から「女子店員比率」は不明であるが、阪急百貨店の場合、1932年末全従業員数3,041人(うち女子店員1,621人、女子店員比率53%)、1933年末3,167人(1,764人、56%)、1934年末3,450人(1,948人、56%)、1935年末3,562人(2,012人、56%)、1936年末3,665人(2,087人、57%)と女子店員比率が半数以上を占めている¹⁰⁾。ここから他の百貨店においても一定割合の女子店員が採用されたものと見られる。

ここでは、神戸市立女子商業学校の生徒による阪急百貨店・就職試験体験記を紹介する。(今日の就職試験と一脈通じる部分があるかもしれない)

(1935年 引用者)十二月十五日(日曜日)私は朝八時に目を覚ました。そして、そうそう今日は就職試験の日だと思ひ出して、ぶるぶると身ぶるひした。早速身仕度をして髪を幾度も結び直して、落着かぬ気持ちを沈め様と努力した。朝の中は少し勉強して

と思ったのが、仕度の終わった時は十時少しであつた。十一時半迄にはまだまだ間があると思つたが、電車の故障なんかあるといけないと思つて十時半に家を出た。

上筒井に着いたのが十一時、私がトツプだつた。上筒井ではもう方々の学校の生徒(受験生と思はれる)が、あちこちに三四人づつ待ち合せてみた。十一時四十五分に皆集つて阪急電車に乗つて大阪へ向かつた。行くと早速手袋賣場へ今年の卒業生をさがして事務所をたづねた。まだ三十分程早いから、どこかで遊んできてくれとの事で「腹がへつては戦は出来ぬ」との例で早速食堂で食事をした。めた。

試験当日朝の緊張した様子が伝わってくる。朝八時に起床して少し勉強するつもりが、思いのほか仕度に時間がかかり10時半に家を出た。阪急の上筒井(当時はここが神戸側終点)には早めの11時に到着し、同級生と11時45分の阪急電車に乗って大阪(梅田)へ向かつた。同じ学校の卒業生が勤務しているようで、試験前に阪急食堂で食事をしている。早めに出て来たのだが、この後、二度も試験会場を間違えて遅刻している。

会場では「入店申込書をもらつて、それにいろいろと記入した。原籍地、現住所、氏名、生年月日、家内の様子、(各々の名、年齢、住居、収入高等である)それから自分の事について、いろいろと書きました」と。さらに身体検査を受けた際に、「医者が小さい声で體をみて終つて立ちかけた時に『貴女は何日程休みましたか?』とたづねる。『日です』と答えると『何で?』本当に小さい声で、うつかりしてゐると聞えない位だつた。K先生が、面会の時に『係の人が小さい声で話されるかも知れないが、それは聴力の試験です』と云はれたのを後で『あそうか』と思ひ出した」。なかなか興味深い内容である。わざと小さな声で話して受験生の聴力を試す試験があると学校側が事前に調べて受験生に教えているからである。

10) 狩野弘一編『百貨店総覧(昭和12年版)』百貨店新聞社、1937年12月、p256-257。表の「3,700」はp255で概数。

この受験生は一通り検査が終わると「やれやれ案外やすいな。こんなだつたらやれやれやがな」と安心してゐる。しかし、その後一人一人口頭試問があると聞かされビックリする。「一人一人呼ばれて行つたが約一二分間である」。最初に面接した人に内容を聞いてみると「難しい問題ではなく易いすぐ答へられるものだつたので、又一安心して順番を待つた」。面接の様子は次のようであつた。わずか1～2分とはいえ、文字に起こすと長い。しかし臨場感がよく表れているのでそのまま引用する。

「〇〇さん」と呼ばれてびくつとした心を落ち着けながら、静かにドアを押した。つい立の向ふに机をへだてゝ二人の男の人が、こちらをぢつとみてゐる。一礼して「私が〇〇でございます」と云つた。「お座り」と云はれたので「はい、有難う」と返事をして坐つたが心の底は少しびくびくしてゐた。「私の顔は恐く見えるかね」と、いきなりたづねられて、私はちらとその人の顔を見たが、はつきり見えなかつた。「優しいお顔に見えます」と答へた。後で考へると、二人とも優しくそうな顔をしてゐたやうに思つた。

「はは まさか、こわい顔に見えますとも云はれないね」つて二人で大変笑はれた。私もつひハ、と笑つてしまつた。そしてあわてゝ口へ手をやつた。「年は幾つ位にみえますか」と云はれて、私は全くまごついた。何時もみてゐる人の顔でも年を問はれると分らないものである。ましてや見た事もない人の年などは云へるものではない。すつかりあわてゝしまつた私は、「はあ四十歳位に見えます」と答へてしまつた。もつと若く云へばよかつたなど後で思つたが。

それから少し家の事をたづねられて卒業後貴女ははどこへ務める気ですか等たづねられたが、私はあいまいにごしやごしやと答へておいた。言葉も敬語を使つた筈だつたが、どうだか分らない。後であの時はあゝ答へればよかつた 等といろいろと思つた。

帰り途に、「通る自信ある？」とたづねられたが、実際少しも自信はなかつた。もう一人の男の人は私の顔をじろじろと見ては、紙に色々と書いてゐた。私のアゴのきずをじろじろとみてゐる様に見えて、とても気持ちが悪く心配でした。

「よるしい」と云はれて、一礼してドアを開けた時、皆が一斉に私の顔を見た。そのとたん「やれやれ」と思つてすつとした。

皆の試験がすんでから外へ出たが心配で心配でたまらなかつた。かへりに買物をしに阪急百貨店へよつたが、人で人で一杯だつた。こんなに忙しい中で沢山のお客に接して働く事は大変修養にはなるが、大変難しいことだと思つた。

電車に乗つても、今日の事が心配で心配で仕方がなかつた。(昭和十年十二月十五日)

面接官2人は緊張した受験生をリラックスさせようと氣遣っている。一方で受験生は簡単な質問にもあれこれ気を回して緊張している。両者の対照的な姿がほほえましい。この手記は女子商業学校の『校友会誌』¹¹⁾に掲載されているので、恐らく合格者のものであろう。し

11) 前掲「阪急百貨店就職試験感想」。

かも正直で健全な受験生の内面がよく表現されている。最初の身体検査の様子もふまえて推察すると、百貨店側は(接客にふさわしい)健康で明るい生徒を採用したいと考えているように見える¹²⁾。

それにしても、阪急電車に乗って試験会場の百貨店へ行き、食堂で昼食をとって、帰りに百貨店で買い物をして、また電車で帰る。多くの受験生が同じような行動をしたとすれば、これも就職試験に名を借りた阪急電鉄および阪急百貨店の販売促進の一つのように見えてくる。次にそごうの店員募集を見てみよう。

3. そごうの半日勤務店員

1935年8月、そごうは大阪心齋橋本店の新築(第二期工事)に合わせて「半日勤務店員」を募集した¹³⁾。そごう社史によると、同年3月、そごうはすでに男子90人、女子740人、合計830人を新規採用し、既存店員と合わせて1400人の一般従業員を集めていた。「半日勤務店員」は、一般従業員の配属が完了してから募集された¹⁴⁾。

「半日店員」には2種類あり、第1は「道楽」で就職したい人で「男女を問わず服飾に興味をもつてゐるもの、音楽に理解あるもの、美術が好きの道楽ものなど」である。しかも午後勤務希望で「小遣ひ銭」目的の人に来てもらいたい。「楽器部、運動具部、和洋美術部、婦人和洋裁部、紳士雑貨部、釣道具売場などにたつて専門のサーブイスをやつてもらはうといふ計画である」。第2は、「二十八歳以下の男女で午後半日勤務をなしうる」人である。午後1時ごろから同6時まで売場に立つ。給料は第一の店員はその人の経歴造脂の深さによって個別に決定される。第2の店員は普通日給の6割くらいだという¹⁵⁾。

「半日店員」の目的は一体何なのか。同社常務の木水栄太郎¹⁶⁾によると百貨店は午後から忙しくなるので午前中に人を雇うのは不経済だという。もし夜間営業をやるなら昼夜二交代制の人員配置も可能だが、夜間営業は地下と1階に限定する予定なので人が余ってくる。全館開店後は従業員が1,800人になるので、忙しい時間帯だけ店員を集中させたいという¹⁷⁾。(先に見た通り、すでに採用した人数が1,400人だとすると、1,800人-1,400人=400人となり、半日勤務店員は400人ほど採用される勘定になる)。

他にそごうは、1年ほど前に「物価比較調査員(コンパリゾン・ショッパー)」も募集している¹⁸⁾。これは25~40歳までの女学校卒以上の学歴があり、多少の商品知識がある女性で「五十圓なり百圓なりの金を持つてデパートへ行き他の店に同じ品で自分の店より安い品物

12) こうして採用した女子店員も平均2年余りで辞めてしまうのが阪急の悩みの種であった。そこで阪急はほどなく女子商業学校を設立し安定的に女子店員を採用する計画を立てた。これに大軌、大鉄も追随して学校を設立した。詳細は、前掲『戦前大阪の鉄道とデパート』第9章第1節を参照のこと。

13) 「デパートは新しがりや有閑紳士淑女よ“半日店員”いかが」『大阪朝日新聞』1935年8月27日付、神戸大学経済経営研究所、新聞記事文庫、経営(7-181)。

14) 株式会社そごう社長室公報室編『株式会社そごう社史』同社、1969年、p244。

15) 前掲「デパートは新しがりや有閑紳士淑女よ“半日店員”いかが」。

16) 同前。木水はそごう一族の十合徳太郎(合資会社時代の代表社員)の実弟で、昭和初期のそごう発展の立役者である(「大百貨店『そごう』の飛躍と常務木水栄太郎君の力闘」『新興実業』第6巻第16号、1935年8月)。

17) 木水は「道楽もの」募集の目的については述べていない(前掲『大阪朝日新聞』)。

がある時にそれを買って来さへすれば報酬が貰へる」仕事である。自由勤務で週に2～3回打ち合わせに出勤する程度でいいという。

ここから、そごうは店内の多様な品ぞろえに合わせた商品知識をもつ人材を必要としていることがわかる。興味深いのは、ユニークな店員募集によって新聞などマスコミに取り上げてもらうこと(パブリシティ)を意図している点である¹⁹⁾。「半日勤務店員」の場合、新聞が四段抜き社会面トップニュースで扱ったため、「外壳部員を通じ、知人を頼って志願する有閑マダム、趣味家が二千人を突破して木水常務を驚かした」という²⁰⁾。募集が自社の宣伝になっている点では阪急と同じであるが、そごうはそれを意図的に行っているところに特徴がある。多数集まった「趣味家」は貴重な人材であるだけでなく、大事な顧客になることを見抜いていたのであろう²¹⁾。

むすびにかえて

これまで、新聞記事を頼りに各百貨店の女子店員の接客対応を概観し、各店の個性がストア・イメージを形成していることを見た。例えば、三越の和服姿と高島屋の洋服姿、素人対応の阪急に対して、顧客とのなじみ(外商)を重視するそごうなどである。次に、女子店員の採用活動からどのような店員を求めているのか、阪急、そごうの事例を確認した。阪急は素直で健康な女子店員を募集しており、そごうは一般店員に加えて専門分野に強い店員を求めていることが判明した。そして、こうした採用活動は応募人数の多さからみて、実は百貨店自身の宣伝にもなっており、さらには将来の顧客獲得の一手段でもあった。

ところで、百貨店の男子店員も含めて当時の店員募集について若干補足しておきたい。そのことで昭和初期の女子店員採用の意義がよりハッキリすると思うからである。

呉服系百貨店の場合、昔は高等小学校卒の男子を「小売員」として採用することが一般的であった。なぜなら「日本の衣服ぐらゐ良い材料、品質、模様、縞柄の複雑なものは世界に類を見ない。そこで顧客の満足の行く様なサービスをするためには、店員は呉服物に関し、並々ならぬ知識と注意を必要として、出来合いの学校卒業者では間に合はず、子飼から養成した店員でなければならぬところから、高等小学校卒業者を多く採用し²²⁾」たのである。すなわち、呉服に関する知識と経験を自店で身につけさせるべく、低学年の生徒を「小売員」として採用したのである。

18) 「近代婦人に耳寄りな新職業」『神戸新聞』1934年4月24日付、神戸大学経済経営研究所、新聞記事文庫、婦人問題(4-080)。

19) この種の事例はもう一つある。特別喫茶室の名称をめぐる宣伝部長と大阪毎日新聞記者が雑談していた。「洋酒も売るんだからカフェーそごう」はどうだと笑い話に出たところを「そごうのカフェー経営」という見出しで新聞報道された。これはそごうがカフェーをやるという内容で、その宣伝効果は市内のカフェー組合が大恐慌を来すほどで、「半日勤務店員」以上だった(『百貨店新聞』第272号、1935年10月1日付、第44面)。

20) 同前。

21) 通常の店員が退職しても、今度は顧客として百貨店とつながりをもつことを指摘した研究に、近藤智子「『デパートガール』の登場 -震災後東京の百貨店を中心に」(『経営史学』第40巻第3号、2005年)がある。

22) 前掲『現代職業総覧(商業篇Ⅱ)』p33。

しかし昭和初期になると、(すでに見てきた通り)女子店員が大量に採用されるようになる。これは一体なぜだろう。その理由として「元来女子店員の愛嬌ある明るい感じが、顧客の獲得、サービス上販売員に最も適」している²³⁾ことと、それ以上に「常に百貨店の悩みの種」である「人件費」の調節弁としての役割が重視されたようである²⁴⁾。他にも、百貨店の品ぞろえが呉服から拡大して洋服や雑貨、家具、食品などに多様化したり、百貨店の大衆化により客層が変化したりして、必要な販売知識や技術が変化したこともあるだろう。この問題については今後の課題としたい²⁵⁾。

最後に、昭和初期の「小売員」に関する事例を紹介してむすびとしたい。

1つは、神戸の百貨店幹部が、ある集会で「今後小売員を採用しない」と話したことが発端で、神戸の小学校関係者が一斉に反発した事例である。

1932(昭和7)年7月9日付の新聞によると、「最近各百貨店ではごく少数のメッセンジャー・ボーイやエレベーター・ボーイを除いてはなるべく小学校卒業者を店員に採用しない傾向にあるが、その理由は那邊にあるのか」という問いに対して、神戸の呉服系百貨店教育部次長が社会事業の集会で次の4点を指摘した²⁶⁾。

すなわち、第1に素質の不良、「由来呉服の売場に働く者は『子飼』の者に限るといはれてゐたが、今ではその信用も裏切られてゐます。中学校以上の卒業者に比べて智能が発達しておらず、研究心に欠け、応用の才に乏しい」という。第2に境遇上の不運、家庭が貧困な場合、自然陰鬱で万事に不平不満が多く感謝の念がない。第3に職業に不熱心、「入店当時は馬車馬的に良く働くが二三年たつとだんだん不平を訴え出し、自分の仕事を嫌ふやうになる。第4に年齢の関係、すなわち高等小学校卒から徴兵検査までの間は一番教化困難の時代である。一方、中等学校の卒業生の場合、一番危険な時代を学校で過ごすので比較的無難であるという。

これに対して、神戸高等小学校校長らが反論を寄せた²⁷⁾。「小学校卒業者に対する一般社会の誤解を誘発する看過できない奇怪な言である」と全国大都市各高等小学校長会とともに声明書を発することになった。

興味深いのは、反論の材料として、(神戸高等小学校校長会による)全国百貨店従業員の出身学校の統計調査が提示されたことである。同調査によると、(全国百貨店)従業員総数

23) この点を、(大量採用されて数年で退職していく)女子店員の対人技能(丁寧な対応)として詳細に検討した、江口潔「戦前期の百貨店における技能観の変容過程—三越における女子販売員の対人技能に着目して—」(『教育社会学研究』第92集、2013年7月)がある。

24) 同前、p34。

25) 女子店員の採用は拡大するのだが、経営者には不満もあった。例えば大丸の里見純吉は「男店員は一生の仕事として熱心にやつて立身出世を図るが女店員は三年か五年かして結婚することになればそれきり辞してしまふので、いきほひ消極的になつて大過さへなければと仕事に對して熱が足りないのです。だからお客様が何か質問しても男店員ほど詳しく研究してないので十分に答へられない。この點は最初女の方がお客あたりが好いだらうといつてゐた予想は裏切られました。デパートの仕事には女にふさはしいものがあるのですが、もつと女の人が職業意識をハツキリさせてたとへ働く期間が短くても短いなりに全力を注いで没頭するやうになつてくれれば好いと思ひます」という(「その後」に聴く大丸里見純吉・裏切られた女店員のサービス)『大阪朝日新聞』1931年2月7日付、第9面)。

26) 「小学校卒業者は店員に不向き」『大阪朝日新聞』1932年7月9日付、神戸大学経済経営研究所、新聞記事文庫、経営(6-031)。

27) この段、「小小店員をめぐる就職戦線の波瀾」『神戸又新日報』1932年7月26日付、神戸大学経済経営研究所、新聞記事文庫、社会事情(7-027)による。

図2．京阪デパートの求人広告

集募員店	集募員店	集募員店
業西〇園 切紹區樹 八介阿歴 月所波書 廿へ一婦 三日本一 正持央 午参職へ 小 店員 高 小 卒 心 身 健 全 上	業西〇園 切紹區樹 八介阿歴 月所波書 廿へ一婦 三日本一 正持央 午参職へ 男 店員 中 甲 乙 種 商 業 学 校 卒 心 身 健 全 上 エ レ ベ ー タ ー ガ ー ル 十 七 歳 以 上 高 小 卒	業西〇園 切紹區樹 八介阿歴 月所波書 廿へ一婦 三日本一 正持央 午参職へ 食 堂 女 店 員 高 小 卒 心 身 健 全 上 女 店 員 十 八 歳 以 上 高 小 卒 心 身 健 全 上
トーパデ阪京	トーパデ阪京	トーパデ阪京

出所：『大阪毎日新聞』1933年8月19日付、第3面。

17,599人のうち、高等小学校卒業生が8,715人で最高、尋常小学校が2,032人、中等学校1,648人、女学校1,260人、その他3,944人となっている。さらに、幹部級の内訳も、第1位が高小および尋小卒業生が占め課長級101人、主任級476人、第2位が実業学校で課長級約21人、主任級153人、第3位が大学出で課長約28人、主任級100人、第4位は中学出の課長21人、主任78人となっている。

ここから、当時の百貨店従業員の半数以上が小学校卒であること、課長・主任級も小学校卒が多い（ただし、幹部になれる率はかなり低い）ことがわかる。この時期まだ百貨店の主力は小売員上がりの従業員だったのだ。

2つ目は、昭和初期のデパート店員の募集広告である。図2は1933年8月新聞に掲載された京阪デパート開業前の店員募集広告である²⁸⁾。

まず、一括募集ではなく、職種別に募集が行われている。さらにその際、男女別かつ学歴別の区分がある。右から見ていくと、「女店員」は18歳以上で高等女学校卒・健康・容姿が美しいこと、「食堂女店員」は14歳以上で高等小学校卒・健康・容姿が美しいこと、さらに「エレベーターガール」は17歳以上高等小学校卒・健康・容姿が美しいことが条件である。一方、「男店員」は18歳以上甲・乙種の商業学校もしくは中学校卒、心身健全であること、「小売員」は14歳以上高等小学校卒、心身健全であることが条件となっている。

ここから、従来型の小売員募集に加えて、中等学校卒の男子店員の募集が行われていること、残り半分が女子店員の募集枠で、職種ごとに細かく募集が行われるようになってきていることがわかる。新しい採用基準が、百貨店の経営的な理由から登場してきたのである。

参考文献

- ・江口潔「戦前期の百貨店における技能観の変容過程－三越における女子販売員の対人技能に着目して－」『教育社会学研究』第92集、2013年7月。
- ・株式会社そごう社長室公報室編『株式会社そごう社史』同社、1969年。

28) 京阪デパートは京阪電鉄と白木屋（元経営者ら）の共同出資で誕生した小規模百貨店である。前年に白木屋大阪店が閉店したので、一部は京阪デパートに再雇用されたようだが、それでも足りず店員募集となったのだろう。詳しくは前掲『戦前大阪の鉄道とデパート』第3章を参照のこと。

- ・狩野弘一編『百貨店総覧(昭和12年版)』百貨店新聞社、1937年12月。
- ・鬼頭篤史「大正末期～昭和初期の店員像 雑誌『商店界』を中心に」『風俗史学』第60号、2015年3月。
- ・古谷ツル「女店員のことども」(小松徹三編『日本百貨店総覧第一巻三越』日本百貨店新聞社、1933年。
同 「男店員は汝等の敵と思への訓へ」『商店界』第13巻第7号、1933年7月。
- ・近藤智子「『デパートガール』の登場 -震災後東京の百貨店を中心に」『経営史学』第40巻第3号、2005年。
- ・社会調査協会『現代職業総覧(商業篇Ⅱ)』春秋社、1931年。
- ・神野由紀『百貨店で「趣味」を買う 大衆消費文化の近代』吉川弘文館、2015年
- ・末田智樹「大正期いとう呉服店(松坂屋)の接客法に関する史料紹介」『中部大学人文学部研究論集』第36号、2016年7月。
- ・『国立歴史民俗博物館研究報告』第197号、2016年2月。
- ・谷内正往『戦前大阪の鉄道とデパート』東方出版、2014年。
- ・玉利智子「日本における百貨店の社会文化的機能とジェンダー・アイデンティティの形成 百貨店女性店員に見る近代都市文化と百貨店の社会史」『文化経済学』第2巻第2号、2000年9月。
- ・中村利器太郎『私より見たる三越回顧録』日本百貨店通信社、1936年。
- ・村上信彦『大正期の職業婦人』ドメス出版、1983年。
- ・山本武利・西沢保編『百貨店の文化史』世界思想社、1999年。
- ・吉見俊哉「デパートガールたちの世界(上・下)」『RIRI 流通産業』第27巻第4・8号、1995年。
- ・「阪急百貨店就職試験感想」『校友会誌』第21号、神戸市立女子商業学校、1936年3月。
- ・「デパートは新しがりや有閑紳士淑女よ“半日店員”いかが」『大阪朝日新聞』1935年8月27日付、神戸大学経済経営研究所、新聞記事文庫、経営(7-181)。
- ・「大百貨店『そごう』の飛躍と常務木水栄太郎君の力闘」『新興実業』第6巻第16号、1935年8月。
- ・「近代婦人に耳寄りな新職業」『神戸新聞』1934年4月24日付、神戸大学経済経営研究所、新聞記事文庫、婦人問題(4-080)。
- ・「その後に聴く大丸里見純吉・裏切られた女店員のサービス」『大阪朝日新聞』1931年2月7日付、第9面。
- ・「小学校卒業者は店員に不向き」『大阪朝日新聞』1932年7月9日付、神戸大学経済経営研究所、新聞記事文庫、経営(6-031)。
- ・「小小店員をめぐる就職戦線の波瀾」『神戸又新日報』1932年7月26日付、神戸大学経済経営研究所、新聞記事文庫、社会事情(7-027)による。
- ・「三越の接客標準用語」『調査彙報』第5年第6号、日本百貨店商業組合、1937年6月。
- ・株式会社白木屋(白木商業学校)「店員の言葉の使い方」『調査彙報』第2年第5号、日本百貨店商業組合、1934年5月。